

経済過程における意識とイデオロギー ——ポスト・マルクス（その1）——

角 田 修 一

はじめに

1. メーリング「史的唯物論」における意識論
2. プレハーノフにおける意識とイデオロギーの理論
3. プハーリン「史的唯物論」における意識と行為の理論 —以上（その1）—
4. ルカーチ「物化」論における意識とイデオロギー
5. コルシュの意識＝精神的な生活過程の現実性論
6. グラムシ「実践の哲学」のイデオロギー論

ま と め

はじめに

筆者は先に「経済過程における意識とイデオロギー」の問題をK・マルクスに即した形でとりあげた(角田 2013)。そこでは『資本論』第3部主要草稿(第1～3章)を検討し、その結果、(1)経済過程において行為する当事者の意識はその行為とともに経済過程のなかに含まれている(2)行為する当事者の実践的意識は資本制経済の表面に現れた姿や「物象」の世界に対応する感覚や知覚を形成し、期待・動機・意志などとなって現れる(3)当事者の実践的意識は資本制経済の内的本性からみれば転倒した姿をとるので、理論的思考はそうした現象と当事者の意識行為を概念的に把握したうえで概念からそれらを展開しなければならない、したがって、「経済学批判」は資本概念にもとづく資本家的意識とその行為の批判的考察でもあるとの結論をえた。

以上の結論をふまえて、つぎのような問題を提起することにしたい。「経済学批判への一般的序説」(1857年執筆)でマルクスは自身の経済学の方法を「理論的方法」と名づけたが、同じ「序説」でこの方法とは区別して「実践精神的に世界を自分のものにする方法」というものをあげている。また、「『経済学批判』序言」(1859年公刊)では「精神的な生活過程」「社会的意識諸形態」「イデオロギー的諸形態」といった用語を用いている。こうした実践的精神や社会的意識およびイデオロギーと、経済過程における意識との関係をどのように理解すればよいか。これらのあいだの関係は、存在と意識一般、あるいは土台と上部構造という二分法に還元してよいだろうか。そして、これらの用語は、労働者が資本家的意識に対抗し、自覚的な階級意識を形成する諸契機を明らかにするうえで重要な意味内容をもってくるのではないか。

このような問題関心から、本稿では、マルクス以後(=ポスト・マルクス)の史的唯物論に関す

る代表的な著作あるいは論文のなかで、意識とイデオロギーの問題がどのように扱われたかを検証する。「その1」では、1890年代のポスト・マルクスの初期を代表するメーリング論文（1893年）とプレハーノフ論文（1895年）およびプレハーノフの著作（1908年）、ブハーリン『史的唯物論の理論』（1921年）をとりあげる。この後に予定する「その2」では、ブハーリンのテキストにたいする批判を意識したルカーチ『歴史と階級意識』（1923年）、コルシュ『マルクス主義と哲学』（1923年）、そしてグラムシ「獄中ノート」（1929～1935年）の議論を検討する。

意識とくにイデオロギーに関するこれまでの議論は、主にマルクス、エンゲルスの共著『ドイツ・イデオロギー』（1845～46年執筆）をめぐって行われてきた。この著作が公表されたことがイデオロギーという用語を広く哲学や社会科学の世界で問題化する契機となったからである。しかし、本稿でとりあげる論文や著作は『ドイツ・イデオロギー』のリヤザノフ版（1926年）、アドラツキー版（1932年）刊行以前のものがほとんどであるから、『ドイツ・イデオロギー』におけるマルクス、エンゲルスのイデオロギー論と直接に比較対照することを課題としなかった。マルクスとエンゲルスがイデオロギーについてどのように論じたかについては独自の対象として別の論稿を必要とするテーマであると考えている。

一般に、いわゆるマルクス主義におけるさまざまな議論は、それぞれの時代の社会変革の実践的課題と結びついている。これらの理論家たちがそれぞれに生きた社会と時代において格闘した実践的課題や運動方針、その政策などに立ち入ることは、本稿ではできない。したがって、本稿の課題は、マルクスの流れを汲む理論家による意識とイデオロギーに関する理論的遺産を再検討することに限定されている¹⁾。

1. メーリング「史的唯物論」における意識論

フランツ・メーリング（Franz Mehring, 1846-1919）は1890年頃からドイツ社会民主党の理論家として文筆活動に携わり、「マルクス伝」や「ドイツ社会民主党史」などの著作を残し、文芸批評家、歴史家として活躍した。ここでは、1893年に発表された「史的唯物論について」（Mehring 1893）という論文により、意識とイデオロギーに関するメーリングの議論を検討する。

この論文は「史的唯物論のもっとも本質的な特質を展開」（Ebd., S. 300, 訳234ページ）し、広くゆきわたっている史的唯物論の異論にたいし反論を加えたものである。その異論の1つに、史的唯物論が「観念的力を無視し、人間を機械的な発展にたいして無抵抗に翻弄されるものになっている」（ebd., S. 316, 訳248ページ）というものがあつた。

この異論にたいしてメーリングは、エンゲルスからの引用を交えつつ、みずからの言葉でつきのように答えている。

「人間は社会的共同体のなかでのみ意識をもち、自覚的に考え、行動することができる。彼がその構成員である社会的集団（der soziale Verband）がその精神的力をよびおこし、それを導く。……史的唯物論は観念の力（die ideelen Mächte）を否定しない。むしろ、観念の力をその根柢にさかのぼって研究するだけであり、観念がその力をどこから汲み取るかを必要な程度で明らかにする。人間がその歴史をつくることは確かだ。（中略）人間の精神は、人

間社会の歴史的発展を超えるものではなく、このなかにある。それは、物質的生産から、そのうえで、そしてそれとともに成長したのだ。」(Ebd., S.317, 訳249ページ)

このように、メーリングは、人間の精神の発達に社会の発展のうちにあることを明確にし、その法則的発展の根本法則は物質的生産あるいは「直接的生活の生産と再生産」にもとめられると答えている。この答えはなるほど「あまりにも素朴なマルクスの唯物論の核心の忠実な堅持」(コルシユ²⁾)ではある。しかし、メーリングは社会のなかに精神的構成要素があり、それが社会を動かす力であることを認め、存在と意識との単純な二元論に還元していない。これが重要である。

メーリングが取りあげたもう1つの異論は、「史的唯物論はあらゆる道徳的基準を否定する」というものであるが、道徳的基準は歴史的にたえず変化してきた。だから、ある時代の基準を過去の別の時代にあてはめればおかしいことになる。だからといって、「史的唯物論は道徳的基準をけっして否定することはない。むしろ道徳的基準を認識することをはじめて可能にする。……道徳的観念もまた究極的には生産様式の産物である」(Ebd., S.328, 訳258ページ)。

メーリングはこの論文で、イデオロギーに関して特別な考察をしていない。たとえば、ドイツ(プロシア)における歴史学派のロマン主義と国民経済学の自由主義との対立は「ユンカー(=領主)階級とブルジョア階級の階級闘争のイデオロギー的反映であった」(Ebd., S.305, 訳238ページ)といった記述や、宗教その他による「イデオロギー的歴史記述」や「イデオロギー的ヴェール」といった表現などがわずかにその考えをうかがわせる程度である。

メーリング「史的唯物論」における意識とイデオロギーの理論内容は以上である。

メーリングのこの論文は単著『レッシング伝説』の付録に収められたものであったが、同書を送られたエンゲルスは1893年7月14日付けでメーリングにあててお礼の手紙を出している。その長い手紙のなかで、エンゲルスはこの付録論文に言及している。

エンゲルスの手紙によれば、「マルクスのものにも私のものにも通常じゅうぶんに強調されていないこと」がある。それは、「イデオロギー的観念とこれらの観念によって媒介された行動」の「形式的な面、すなわち、これらの観念等々が成立してくる仕方様式の面」である。このことを「なおざりにしてきた」ことが「論敵に誤解ないし歪曲の絶好の機会を与えた」。イデオロギーを生み出す思想家たちは、その思考過程において、本来の原動力を知らないまま、彼自身あるいは先行者たちの「純粋な思考」に素材を求める。そのため、思考が自立した歴史をもち、すべての行動を媒介する根拠となっているかのように考える。マルクスやエンゲルスがイデオロギーに自立的な歴史的発展を認めないと批判するのは、原因と結果とを固定的にとらえる非弁証法的な考えにもとづいており、経済とイデオロギーとのあいだの相互作用を見失っている、とエンゲルスは書いている。(Werke, Bd. 39, S.96-98.)

メーリングについてさらに補足しておく、のちに取りあげるブハーリンやルカーチ、コルシユとの対比では、メーリングが「自然科学的唯物論」にたびたび言及し、これを批判していることに注意しておきたい。「自然科学的唯物論」者として挙げられているのは、L・ビュヒナー、E・ヘッケルなどである。

「自然科学的唯物論は、人間のなかに意識的に行動する自然の創造物を見るが、人間社会の内部で人間の意識がなにによって規定されるかを検討しない。そこで、自然科学的唯物論は歴史の領域にふみこむと、その正反対に、極端な観念論に転化する」(Ebd., S.310, 訳243ページ)

ジ)。

メーリングはさらに、「史的唯物論は自然科学的唯物論を包含するが、自然科学的唯物論は史的唯物論を含まない」(Ebd.)とも述べている。「史的唯物論はつぎの自然科学的事実から出発する。すなわち、人間はたんなる動物ではなく、社会的な動物であること、人間は社会的な集団(群、氏族、階級)の共同体のなかでのみその意識を獲得し、意識をもった被造物として生きることができると、そこでこれらの集団の物質的基礎がその観念的意識を規定し、この基礎の前進的な発展が人間性の発生的な運動法則を表現するものであることがそれである。」(ebd., S. 311, 訳244ページ)

コルシュなどはのちに、メーリングのような旧世代のマルクス主義者が自然科学的唯物論に傾斜しており、そのことは晩年のエンゲルスに責任があると論じたが、上記のようなメーリングの叙述はコルシュのこうした評価が誤りであることを示している。

2. プレハーノフにおける意識とイデオロギーの理論

メーリングによる1893年の論文に続く史的唯物論の重要著作は、エンゲルスが亡くなる年(1895年)にロシアで著わされたプレハーノフ(Г. В. Плеханов, 1856-1918)の『史的一元論』と、そののちに著された『マルクス主義の根本問題』(1908年)である。前著の正確なタイトルは「一元論の歴史観の発展の問題について」というもので、唯物論的な一元論の立場にたってマルクス主義哲学の展開を包括的に扱ったものである。³⁾

プレハーノフの哲学的立場—「実践の哲学」

プレハーノフは、『史的一元論』のなかのある個所で、「弁証法的唯物論」という用語だけがマルクスの哲学を正しく特徴づけることができる、と述べた。⁴⁾すなわち、それによってマルクスの哲学は、「形而上学的唯物論」(ドルバック、エルヴェシウス)、「弁証法的観念論」(ヘーゲル)、「形而上学的観念論」と区別できるのである。(Плеханов 1895, стр. 247, 下35-36ページ)

また、歴史における人間の理性について、「理性は歴史の産物であるから、歴史の創造者になることはできなかった」として、観念論との違いを指摘する。しかし、プレハーノフによれば、弁証法的唯物論は人間の理性の力、理性の権利を制限するものではない。

「理性は、これまでの歴史が遺産として残した現実⁵⁾に服従してはならないし、また自分の本性からして、それに服従することはできない。理性はかならず現実を自分の姿に似せて改造し、現実を合理的なものにしようとつとめる」。理性は「人間の頭脳のなかにある……現実の真の認識のすべて」であるから、「社会的人間の理性の発展を説明するのは社会的生産過程における人間の合法的な活動すなわち行為である」(там же)。

このことから、プレハーノフは、「弁証法的唯物論の実践哲学のすべては行為に還元される。弁証法的唯物論は行為の哲学である」(стр. 248, 下35ページ)と述べて、マルクスが書き残した「フォイエルバッハにかんするテーゼ」(1845年)の第8節を注に掲げている。

「社会生活は本質的に実践的である。理論を神秘主義へと迷わすすべての神秘は、その合理

的な解決を人間の実践と、この実践の概念的把握とのうちに見いだす。」(マルクス⁵⁾)

弁証法的唯物論は実践の哲学であるとするプレハーノフのこの指摘は重要である。それは、唯物論一般にたいして、現代の唯物論である弁証法的唯物論の特性を示しているからである。

プレハーノフによれば、唯物論は「心理現象を物質のあれこれの特質によって、人間の肉体あるいは一般に動物の肉体のあれこれの組織によって説明しようとする。物質を一次的な要因とみるすべての哲学者は唯物論の陣営に属している。精神をこのような要因とみなす者はみな観念論者である。これこそが唯物論一般……についていえるすべてである」(crp. 65, 上12ページ)。

18世紀の唯物論(ドルバック, エルヴェシウス)は、人間の精神的活動、したがってすべての思想や感情が環境(自然と社会)の産物であるとする。しかし、その一方で、人間の見解(あるいは意見)が環境を創造し世界を支配するとみなす。これは「根本的矛盾」であり、社会の発展を説明できない「形而上学的唯物論」である。フランスの啓蒙主義者(コンドルセたち)もまた、不変の「人間本性」と「知性や理性の発展」という矛盾した考えをもっていた。そして、19世紀の空想的社会主義者たちは「人間の本性」にふさわしい社会制度を構想したが、やはり、不変の人間性からどのようにして社会の進歩を説明するか、という問題にぶつかった。

これにたいして、自然と歴史における発展の問題、具体的な生きた現実の複雑で多様な連鎖を理解し説明する課題を引き受けたのは、19世紀の弁証法的観念論、なかでもとくにヘーゲルである。ヘーゲルはいっさいの生命の原理である運動は弁証法的過程であり、生きた矛盾であるとみなした。プレハーノフは弁証法的方法が「すべての科学的認識の魂である」というヘーゲルの方法を認め、具体的に、対立物への転化、量的変化の質的变化への飛躍などをあげる。もっとも彼は、テーゼ、アンチテーゼ、ジンテーゼのいわゆる三段階法については、これをヘーゲルの根本命題とみなして攻撃する者にたいして、「そうではない」と反論する。弁証法的観念論は社会が法則性をもつ必然的な過程であると考えたが、論理的思考を絶対理念として具現し、あらゆる現象の答えを絶対理念に求めて観念論に逆戻りしてしまった。こうしてその次に現れたのが「現代唯物論の代表者」マルクスである。

「人間は外部の自然に働きかけ、それを変化させることによって、自分自身の本性(=自然)を変化させる」という『資本論』(第1部第5章)の言葉にマルクスの歴史理論全体の本質が含まれているとして、プレハーノフは各所でこの言葉を引用する。ここに、プレハーノフが弁証法的唯物論は実践の哲学であるとする根拠が端的に示されている。

意識とイデオロギー

マルクスの弁証法的唯物論すなわち実践の哲学にいたる哲学の歩みを簡潔に整理したプレハーノフは、人間の意識とイデオロギーをつぎのようにとらえている。

まず何よりも生産力の発展が基本におかれるべきである。生産力のある発展段階が一定の生産関係をともなう。その生産関係に応じて、法や政治の制度が形成される。そこで、「社会の構造が与えられると、その構造の性格が一般に、人間のあらゆる心理、すべての習慣、風習、感情、見解、志向、理想に反映することを理解することは困難ではない。習慣、風習、見解、志向、理想はかならず人間の生活様式……に順応しなければならない。社会の心理はつねに社会の経済にたいして合目的的であり、つねにそれに適応し、つねにそれによって規定される。(中略)マル

クスは、心理が社会の経済に順応することを認めることによって、心理の大きな、何ものにも代えがたい意義を認めたのである。」（стр. 198-199, 上227-228ページ）

このように、プレハーノフは「心理」という用語に代表させて、社会的意識が経済過程に適應することを説明している。この場合、彼は、「社会の心理」と「社会の経済」という言い方で、両者を全社会の構造のなかに位置づけていると読むことができる。

では、「高級な序列のイデオロギーである科学、哲学、芸術等々についてのマルクスの見解はどのように理解すべきか」。まず、もっぱら学問上の仕事をする人びとを層として分化させるためには、社会がある程度経済的に発展していなければならない。「イデオロギーの発展の基礎は経済である」という1つの答えがこれである。そのうえで、プレハーノフは、経済学、公法学や政治理論の発展がいずれも生産関係を基礎としていることを指摘する。さらに、哲学、芸術はその時代の精神状態と風習の状態によって説明されるが、この精神と風習の状態が社会環境を作るといった二律背反に陥らないためには、社会環境の特質がそれぞれの時代の生産力の状態によって規定されることを認めなければならない、とプレハーノフは言う。ある時代の支配的なイデオロギーや思想、学説を理解するためにはその時代とその前の時代の精神状態を理解する必要がある。そこには「ヘゲモニー」の移り変わりも含まれることを、プレハーノフはさまざまな事例や主張を検討しながら明らかにしている。

こうして、プレハーノフは、本節のはじめに指摘したように、人間の理性とそれにもとづく「実践の哲学」を提示する。彼によれば、「人間の理性は、盲目的必然性自体の内的法則を認識し、この必然性をそれ自身の力によって打ちやぶることによってはじめて、この必然性に勝つことができるから、知識の発展、人間の意識の発展は思考する個人の最大の、もっとも崇高な任務である」（стр. 248, 下37ページ）。

マルクスとエンゲルスは「理想の基準となるのは経済的現実である」と述べた。彼らは、「必然性を自由へ、盲目的な力を人間の理性の力に従わせるというひじょうに明確な理想」のもとに「実践的活動の方向を決めた」。その実践的活動とは「生産者たち自身の自覚を発達させることであった」（стр. 260, 下54ページ）。

プレハーノフは、この『史的一元論』の後、1897年に「歴史の唯物論的理解について」を書いた。これはイタリアのマルクス主義哲学者ラブリオーラ（Antonio Labriola, 1843-1904）の著作について書かれたもので、このなかで「社会心理」という節を設け、次のように論じている。

人間の意識形態は、いったん社会的存在の地盤のうえに生じた以上、歴史の一部を構成する。社会心理の重要性は、法律や政治制度の歴史において不可欠であるだけでなく、文学、芸術等々の歴史においても、「社会心理を抜きにしては一步も進むことができない」ことにある。社会心理の注意深い研究と理解なしに、もろもろのイデオロギーの歴史を唯物論的に説明することは不可能である。唯物論者にとっては、「一定の国および時代の、一定の社会階級における感情および知性の支配的傾向だけが論題になりうることで、このような感情や知性の傾向は社会諸関係の結果である。」（Плеханов 1897, стр. 250, 訳113-114ページ）

このように、プレハーノフは意識あるいは心理を社会の一部とみなしている。そのうえで、同じ社会内の経済的土台および法的政治的上部構造との関係を論じる。一定の道徳、信仰、観念、思考法、美的感覚等々は、社会の生産力の一定の状態によって制約される社会関係の基礎のうえ

に成立している。ラブリオーラの意見にしたがって、イデオロギーにおいては当該の社会の伝統的観念や自然も間接的に影響するという意味において、イデオロギーにも歴史があるとプレハーノフは論じる。ただし、彼は、ラブリオーラが人種という言葉を用いてこうしたことを論じることには疑問を呈する。歴史的民族は種々の人種的要素がひじょうに長いあいだ強力に交錯し、混合した結果としてできたものだからである。さまざまな習慣や伝統と結びついた意識や表象、観念は、社会諸関係によって生み出された一定の「観念連合」のなかにある。この意味で、「イデオロギーの歴史は社会的諸力の一定の結合の成立、変化、破壊の影響のもとにおける観念連合の成立、変化、破壊によって説明される」（стр. 266-267, 訳149-150ページ）。

以上のように、プレハーノフは、イデオロギーが人びとの頭のなかにおける社会諸関係とその歴史の多様な反映であることを明確にしたとすることができる。

プレハーノフは、続いて『マルクス主義の根本問題』を1908年に出版している⁶⁾。彼は、このなかで、土台と上部構造の関係を簡単な5つの定式にあらわしている。そして、その4と5を心理とイデオロギーにあて、つぎのように定式化した。

「4. 一部は経済によって、一部は経済のうえに発達する社会的・政治的構造によって規定される社会的人間の心理（психика）。

5. この心理の特質をみずからのうちに反映するさまざまなイデオロギー。」（Плеханов 1908, стр. 231, 鷺田訳105ページ）

プレハーノフにおいては、全体として「心理」と「精神」という用語があまり区別されずに使われていることに、この際、注意しておきたい。事実、この定式化のすぐ後では、唯物論は「マルクスが歴史のなかに『精神』の力としてののはたらきをみ、その方向は、どのような特定の時代でも、結局は経済の発展の動きによって規定されるものであることを否定しない」（стр. 232, 鷺田訳106ページ）、と書くのである。

ともかく、ポイントは、「すべてのイデオロギーが所与の時代の心理のなかに、ある共通の根源をもつ」ことをプレハーノフが認めていることである。経済的構造と社会的政治的体制によって規定される人びとの心理と、哲学や政治学、芸術その他において表現されるイデオロギーとを区別しながら、プレハーノフは相互の関連性を認めている。このことが重要である。

3. ブハーリン「史的唯物論」における意識と行為の理論

プレハーノフに続きロシア（および旧ソ連）で史的唯物論に関する重要著作が現れた。1921年、文字通り「史的唯物論の体系的な解説」書として刊行されたブハーリン（Н. И. Бухарин, 1888-1938）『史的唯物論—マルクス主義社会学の一般的テキスト』（以下、ブハーリン・テキスト）がそれである⁷⁾。

本稿ではブハーリン・テキストの体系あるいはその内容の全体ではなく、このテキストが社会的意識と行為およびイデオロギーについて明らかにした内容に絞って検討を加える。

ブハーリンの哲学—弁証法的唯物論

はじめに、ブハーリンの哲学である弁証法的唯物論（同上書第Ⅲ章の表題）について、彼の考え方を簡潔にまとめておく。

ブハーリンは、テキストの最初に「意志の自由」の問題をとりあげ、「人間の意志は生存の外的条件に規定されている」決定論の観点に立たねばならないと結論づける。そして、この「意志の自由」問題から「精神と物質の問題という哲学の基本問題」に接近する。その答えは「社会科学の分野の問題にたいする答えをも左右する」。ブハーリンの考えはつぎのように示される。

まず第1に、人間は自然の一部である。第2に、地球のある時期に生物が生まれ、動物から人間が発生した。第3に、精神は人体という物質が特別に、きわめて複雑に組織された特性として現れる。第4に、物質は精神がなくとも存在するが、精神は物質がなければ存在しえない。したがって、「物質は精神から独立して客観的に存在している」。「唯物論は物質を本源的なもの、基本的なもののみなし、観念論は精神をそのようにみなす」のである。（以上、Бухарин 1923, стр. 52-55, 訳57～60ページ）

唯物論と観念論の問題は、社会科学では、社会的意識から社会を研究する観念論の観点をとるか、それとも物質的生産の発展から社会的意識（精神的生活あるいは文化）を研究する唯物論の観点をとるかという問題になる。ブハーリンは当然、後者の観点をとる。さらにまた、自然と社会を「動的」にみるか、それとも「静的」にみるかという問題がある。あらゆるものが永遠に変化し、流転し、たえず新しい形態を生み出す運動としてとらえる「動的」観点、これが弁証法である。このように世界がたえず運動のなかにあるとすれば、すべての現象が相互に関連しあっているとみなければならない。このことは当然ながら、社会を運動と変化、生成と消滅の過程とみる、社会科学における「歴史主義」に導く。

この「歴史主義」から、第1に、それぞれの社会をその特殊性において研究することがでてくる。第2に、「それぞれの社会形態は、その内部的変化の過程において研究されなければならない」（стр. 71, 訳77ページ）。第3に、それぞれの社会形態は生成と消滅において、したがって他の社会形態との関連において考察されなければならない。

さらに、事物の変化や運動はそのものの「内部矛盾」「内部闘争」によって引き起こされる。ブハーリンはこの矛盾や闘争を「均衡」という用語を使って説明する。すなわち、「闘争は均衡の破壊であり」、また再び新しい基礎の上で均衡が確立し、そして再び破壊される。事物は相互に関連する諸要素からなる体系（システム）であるから、この体系の外部環境と体系とのあいだの矛盾と、体系それ自体の内部の矛盾の2つが存在する。ブハーリンによれば、これが弁証法的な運動である。そして、弁証法的方法の最後は事物の「飛躍的变化」であるが、ブハーリンではこれは「量から質への転化」として説明されるにとどまる。（以上, стр. 74-83, 訳81～89ページ）

因果的法則による社会的決定論

最初に述べたように、ブハーリンは同上書の第Ⅰ章で社会における法則性の問題をとりあげ、因果論と目的論を検討する。そして、社会現象の因果的連関法則を明らかにすることが科学の役割であるなら、目的論ではなく「決定論」が正しいと言う。すなわち、「個人の意志、感情や行為には原因がある、それらはつねに制約され、規定されている」。あらゆる社会現象はたしかに、

人間の意志と無関係に実現するのではなく、人間の意志を通して実現される。しかし、それらの「社会的結果は個々人の行動を規定する」（crp. 34, 訳36ページ）。

「諸現象の説明に必要なのは、目的論ではなく、諸現象の原因の考察、すなわち因果的合法性の発見である。したがって、この問題のなかには社会科学と自然科学とのどのような違いもない。」（crp. 25, 訳24ページ）

このように、ブハーリンは因果律による決定論が科学一般に妥当する方法だと考える。そのうえで、「非組織的社会」である商品生産あるいは資本制社会においては、「1. 社会現象は個人的な意志、感情、行為、等々の交錯から生ずる。2. 社会現象はどのような時点をとっても個人的意志を規定する。3. 社会現象は個人的意志を表わさず、通常その意志に反し、それを強制的に支配する」。他方、「組織された社会」である共産主義社会においてどうか。第1に、「社会現象が個人的意志、感情、行為、等々の交錯から生ずる」のは非組織的社会と同じだが、「過程は自然発生的ではなく、決定的な分野においては組織的に行われる」。第2の「社会現象がどのような時点をとっても個人的意志を規定する」ことも同じである。第3の「社会現象は個人的意志を表わさない」という点では「非組織的社会」と異なり、「組織された社会」における「社会現象は人間（引用注一個人ではない）の意志を表わし、通常その意志に反しない。人間は自分たちの決定を支配し、社会の自然的不可抗力に合理的な組織がとってかわる」（crp. 38-40, 訳40~42ページ）と言われている。

これをブハーリンは「社会的決定論」と名づける。人間の意志を決定のなかに位置づけることにより、歴史的発展の要因としての人間の意志を否定する宿命論と、これにとらわれている社会民主主義者の見方を批判するのである。

しかし、ブハーリンが「決定論」というときには、原因のない現象としての偶然は存在せず、偶然と見えるのはわれわれがその原因を知らないからだとされる。「社会の歴史的発展には偶然的現象などはまったく存在しない」、あるいは「社会科学から偶然性の概念を追放しなければならぬ」（crp. 44, 邦訳46~47ページ）などと述べているので、ブハーリンは偶然と必然の関係を因果性の相関だけから判断し、因果連関に還元しているのである。このあたりをみれば、ブハーリンはヘーゲル論理学から学んでいないように思われる。ヘーゲル論理学では偶然性と必然性は可能性と現実性との関連でとりあげられるカテゴリーであるが、ブハーリンの史的唯物論には可能性と現実性というカテゴリーはない。⁸⁾

このようにみえてくると、先にブハーリンが事物の内的矛盾を均衡とその破壊、そして新たな均衡の回復として論じていることの理論的限界は明らかである。ブハーリンの矛盾論は「現存するものの肯定的理解のうちにその否定、必然的没落の理解を含む」（マルクス）というものではない。すなわち、現存するものの内部矛盾に新たなものが生まれる可能性を示す要素が含まれないのである。現存するものを否定し、新たな可能性が現実性に転化することを制限する要因がそのものにあるから物事には限界があり、矛盾がある。このような「生きた矛盾」がブハーリンの矛盾論にはない。

さらに、事物の内部矛盾を明らかにすることは、その解決形態である新たな事物への転化を理論的に予見することができる。その意味では、目的論にも合理的な側面がある。ブハーリンのように機械的な決定論の立場に立ち、目的論をまったく排除してしまうことは正しくない。

このようなブハーリンの機械論はシステムとしての社会の見方につながっている。

社会システム論と労働の技術的過程への還元

ブハーリンによれば、社会とは相互に関連しあいながら社会を構成する諸要素あるいは諸部分のあいだの相互作用からなる「現実的総体」である（「システムとしての社会」）。このシステムとしての社会と環境との間には不断の連関と相互作用が存在する。この連関のなかでもっとも基礎的なものはいまでもなく労働の連関であって、労働の連関は自然と社会とのもっとも密接な関係を表わしている。ブハーリンは、ここにいたって、「われわれは完全な唯物論的な社会観に到達するのだ」（第IV章「社会」, стр. 95, 訳106ページ）と説明する。

このように、ブハーリンは社会を「現実的総体」あるいは「システム」と表現している。そこでは「相互作用」というカテゴリーを多用されるので、社会的関連をすべて、先にみたような因果法則に還元しているわけではない。ブハーリンの史的唯物論にたいして、かつてのソ連では均衡論だという批判がなされた（デボーリンほか 1930）。ブハーリンの議論の特色は社会システム論にたった力学的動態論として均衡と不均衡を論じるころにある。均衡という力学的用語を用いたシステム論は、環境への適応とその不断の破壊という見方を含め、欧米の社会システム論に近いといえる。しかし、力学的均衡論で矛盾を説明したことや、先の偶然性カテゴリーの否定が批判を招くことになったのは当然である。そうした批判が政治的な意図をもってなされたものとしても、彼の理論的弱点は否定できない。さらに、ブハーリンには、ヘーゲル、マルクスにある普遍—特殊の弁証法によって有機的総体を概念的に把握する論理はまったくみられない。この点は後に検討するルカーチも含め、ブハーリン批判のポイントである。

さらに、ブハーリンの言う労働の連関とは、労働過程における「心理的、精神的連関」あるいは「心的相互作用」ではなく、「物理的物質的關係」である。しかし、これでは、労働過程における精神的要素あるいは側面（ブハーリンの言う「考え、意見を交換し、互いに語る」こと）を事実上排除していることになるであろう。ブハーリンのように労働過程を人の結合や機械の配置などの物理的関係だけに還元することが唯物論なのではない。経済過程において（もちろん労働過程において）精神的要素は本質的に不可欠な要素であり、人間の労働は合目的性をもった意識的活動である。たとえば、石炭の有用な性質やそれを利用するための知識は労働過程に固有の要素である。その精神的要素を取り除いてしまえば、それは人間の労働ではなくなるだろう。ブハーリンは人間の意志の役割を認めながら、他方では、唯物論は精神や人間の意志などを取り除いた物理的あるいは技術的過程に還元するものだという一面的な理解がみられる。

精神的生活と上部構造

では、「心理的あるいは精神的生活の領域」をブハーリンはどのように説明しているだろうか。「言語、政治体制、科学、芸術、宗教、哲学、さらに流行、慣習、礼儀作法のきまり等々、といった多くのこまごました事柄——これらのものはすべて社会生活の産物であり、人間の相互作用、人間相互の不断の交渉の結果である。／社会の精神生活もまた個々人の観念や感情のたんなる総和ではなく、彼らの共同生活の一所産である。（中略）それはまさに人間の相互作用から生まれる新しいものである。」（стр. 102, 訳112～113ページ）

このように、ブハーリンは精神的生活の重要な役割を認めながら、そして、それを個々人の意識や感情に還元せず、単純なその総和（総計）ではないとしながら、経済過程からは精神的要素を排除し、精神的生活を相互作用で説明する。ここには、精神的生活における人間相互の社会関係が社会総体のなかでもつ位置についての考察が欠けていると言わねばならない。

つぎに、ブハーリンが上部構造とイデオロギーについて言及するのは、テキスト第Ⅶ章「社会の諸要素間の均衡」である。社会の諸要素間の均衡というとき、ブハーリンがまずあげているのは、「物、人間、そして観念の構成が相互に対応していること」である。社会は観念をも生産する。社会において生産され、組み立てられた観念は「全体的観念体系」（стр. 148, 訳165ページ）をなすとブハーリンは（正しくも）述べている。

「社会の社会的・政治的構造（略）、風俗、法律および道徳（社会規範、すなわち人間行為の準則）、科学と哲学、宗教、芸術、そして最後には人間間の交通手段としての言語。これらすべての現象は、社会の社会的・政治的構造以外は、通常『精神的文化』といわれている。

（中略）精神的文化は物質的文化とまったく同様に社会生活の所産であり、社会の一般的生活過程に含まれている。」（стр. 166, 訳183～184ページ）

このなかの社会規範（ノルム）すなわち行為の準則には、慣習、道徳、法律、その他の多種多様な規範（礼儀作法、儀式、団体等の規約など）がある。これらは社会の経済的諸関係に対応し、これを基礎として成長し、変化し、消滅する。私的所有にもとづく生産関係が法律用語では所有関係として表現されるのと同様に、「道徳意識はその物質的存在を反映し、かつ表現する」。

また、ブハーリンは、科学と哲学、宗教がたんに「観念体系」につきるものではなく、それ自身の技術、物的機構、人的機構をもつことを認める。肝要なのは、これらが人間の対自然、および社会内の実践の必要から生まれるということである。これらは結局、社会の経済的および技術的条件あるいは物質的生存条件に規定される。宗教と哲学は世界のもっとも一般的で抽象的な結合原理について何らかの解釈を与えるものである⁹⁾。なかでも、哲学は、「多数の専門に分かれている諸科学を統合し」、「世界に対する全体的な見方（いわゆる世界観）の基礎たろうとする」（стр. 205, 訳226ページ）。しかし、哲学は技術や経済に直接、無媒介に依存しているのではなく、両者のあいだには多くの中間的な環が存在することにブハーリンは注意を促している。

つぎに、ブハーリンは、「もっとも一般的な2つのイデオロギー的上部構造」を「言語と思考」に求める。言語と思考がその発生、発達において社会と関連していることは明らかである。とくに、生産的活動の進展とともに言語と認識活動は変化し発展する。

そのうえでブハーリンは、社会心理について考える。科学的思考とは正反対の「社会心理とイデオロギーとの差異は、系統化の程度にある」（стр. 241, 訳266ページ）。社会には支配的な、しかし発展の諸条件によって変化するところの心理がある。それは支配階級の心理に帰着する。「社会心理はイデオロギーにとって一種の貯水池」である。あるいは、「イデオロギーは社会心理を体系化する。それは社会心理の凝結物である」（стр. 248-9, 訳273～274ページ）。「社会心理とは、所与の社会、階級、集団、職業、等々のなかにあるところの、体系だっていない、あるいはわずかしこ体系だっていない感情、思考および気分を意味する。」（стр. 239, 訳264ページ）

以上をうけて、ブハーリンは、いわゆる社会の上部構造について次のように要約している。

「上部構造とは、経済的基盤の上に存在するところの社会現象のあらゆる形態を意味する。

たとえば、社会心理、あらゆる物質的部分（たとえば大砲）と人間組織（官吏の位階制度）を伴った社会・政治機構、および言語あるいは思考のような諸現象がこれに属する。したがって上部構造とはもっとも一般的な概念である、社会的イデオロギーとは、思想、感情あるいは行為の準則（規範）の体系を意味する。したがって、科学の内容（中略）、芸術、規範、風俗および道徳の相対などがここに属する。」（стр. 239, 訳264ページ）

このように、ブハーリンはイデオロギーを上部構造のなかに含める。ブハーリンはたしかに、精神生活を物質的あるいは経済生活とは別の、社会的生活過程の1つとみなし、その所産を詳しく検討している。イデオロギーを精神的生産物ととらえ、イデオロギーを生産する労働を物質的生産労働とは区別された、労働の特殊な種類ととらえている。たとえば、「上部構造的性格の労働」とその基礎をなす物質的労働のあいだの均衡配分などと述べている。イデオロギーが独自の重要性をもつことや、それ自身の「表象様式」を有することも積極的に論じられている。

しかし、生産（経営）管理から芸術、科学、教育、社会心理にいたる、およそ直接的生産以外のあらゆる社会領域の機能をイデオロギー、さらに上部構造に含め、物質的生産の領域と対比するのは、一方で直接的生産過程を狭くとらえ、他方で上部構造をあまりにも広くとらえている。この区分もきわめておおざっぱな区分と言わねばならない。マルクス「序言」（1859年）をていねいに読めば、存在と意識、土台と上部構造および社会的意識形態、物質的生産の過程とその他の社会的、政治的および精神的生活過程とが明確に区分して書かれている。こうした区分がブハーリン¹⁰⁾にあっては単純に土台と上部構造とに還元されてしまっているのである。

意識論の問題点

ブハーリンの場合、このような二分法への還元がどうして生じたのだろうか。

第1に、ブハーリン・テキストには意識一般についての理解や説明がない。ブハーリンは「言語と思考」を「もっとも一般的な2つのイデオロギー」とするが、言語と思考はまずイデオロギーとは区別し、人間の存在にとっての意識の意味や意義をとらえるべきである。そのうえで、彼が重視した社会心理、そして体系化された規範体系や法的、政治的イデオロギーなどを社会意識の独自の層として重層的に論じるべきであった。

第2に、先にみたように、ブハーリンは経済過程から意識を追放してしまった。生産や経営の管理をも上部構造に含めてしまったことはそのことをよく示している。哲学、宗教、科学、社会心理、法的意識や政治的意識などは、マルクスの言う精神的生活過程において形成される社会的意識の諸形態である。意識は、実践的精神としては、経済過程である物質的生活過程に経済行為としてあるだけでなく、社会的、政治的生活過程においてもさまざまな意識的行為として存在する。そうした重層的な社会生活の諸過程と、法的・政治的上部構造それ自体とは区別されねばならない。このことは各種の社会制度についても言えることである。

物神崇拜と「技術的法則」

ブハーリン・テキストによれば、資本制生産様式に対応する支配的なイデオロギー的「表象様式」は商品の物神崇拜（フェティシズム）である。資本制世界では労働と労働との連関は商品の価値として現れ、人と人との関係はモノとモノとの関係として現れる。「モノに不可解な特性を付

与する商品の物神崇拜が資本制的『表象様式』の特殊な性質であり、資本制商品社会のイデオロギーである (crp. 278, 訳304-305ページ)。物神崇拜は道德規範あるいは倫理の世界に非常に鮮やかに現れ、哲学の世界における「定言的命令」(カント)としても表現される。

ブハーリンは、プロレタリアートはこの物神崇拜にとらわれてはならないとする。ブハーリンによれば、プロレタリアートにとっての行為規範は「技術的法則」である。それは「椅子を作る家具師にとって」の材料の加工作業のようなものである。そして、共産主義における倫理は「技術的法則」に置き換わるので、「倫理は消滅する」。これがブハーリンの説明であった。ここには、労働者階級にとっての新しい、独自のイデオロギーのあり方においても、いわば技術還元主義を貫くブハーリン特有の考え方がうかがえる。

彼は、生産力と生産関係の矛盾を「物質的基礎」とする「革命の過程」を4つの段階ないし局面に整理している。第1段階は「被抑圧階級の心理とイデオロギー」における「思想革命」である。「革命の前提は、新しい階級の意識の革命化、旧社会の墓掘人としての階級のイデオロギー革命である」(crp. 300, 訳335ページ)。しかし、その「心理とイデオロギーの革命」の内容は、労働者階級がたんに「既存の秩序では生きていけない」と意識するようになることであり、「国内平和の心理とイデオロギー」が解体され、「内乱の心理とイデオロギー」に転換することである¹¹⁾というにすぎない。

実際、『史的唯物論』の最後の章では「階級と階級闘争」を論じ、階級心理と階級イデオロギーが物質的生存条件によって規定されているとしながら、労働者が階級的自覚に至る過程についてはマルクスの『哲学の貧困』(1844年)からの長い引用(即自的階級から対自的階級へ)ですませる。マルクスが『資本論』で明らかにした「労働者の自覚」の諸契機である「自由な人格性」「労働日の制限のための階級的結集」「労働需給法則への意識的介入」「結合労働からアソシエー¹²⁾ト(協同)した労働への展開」などについてはまったく言及されていないのである。

注

- 1) 本稿は、いわゆるマルクス主義のなかでも社会民主主義を代表する理論家たち(E・ベルンシュタイン、K・カウツキー、R・ヒルファーディング、いわゆるオーストリア・マルクス主義者)における意識とイデオロギーの議論をとりあげていない。それは著者の力が及ばなかったことによるので、これらの理論家たちの考えが無意味だと断定しているからではない。ただ、これらの理論家たちは19世紀後半から起こった新カント派哲学と方法論に強く影響されていたことだけを指摘しておかねばならない。新カント主義とマルクス主義との関係については、さしあたりリヒトハイム(1961)が参考になる。リヒトハイムによれば、「修正主義論争は、もっとも普遍的な哲学上の問題に論究するのとなければ、理解できない」(Lichtheim 1961, p. 299, 邦訳251ページ)。それにたいし、本稿でとりあげる論者たちの議論の背景にあるのはヘーゲル哲学である。ヘーゲル＝マルクス関係をふまえなければ本稿のテーマの真の意味を理解することは困難である。
- 2) Korsch, K. (1967) S. 194, 訳294ページ。
- 3) プレハーノフは「ロシア・マルクス主義の父」ともいわれ、革命家、思想家としてはナロードニキとして活動することから出発してマルクス主義の立場に移行し、ナロードニキの主な見解と闘った。1903年以降はメンシェビキ(ロシア社会民主労働党少数派)に属した。『史的一元論』はナロードニキによるマルクス主義批判に答えたもので、「ロシアのあらゆる世代のマルクス主義者を育てた」(レーニン)著作といわれる。エンゲルスは最晩年にこの本を手に入れ、プレハーノフに「ロシア国内で

これが出版できたのは大成功だ」とお礼の手紙を送った（1895年2月8日付け、Werke, Bd. 39, S. 405.）。

プレハーノフは文学、芸術、宗教の分野でも多くの業績を残し、リャザノフ編集による著作集全24巻が1923-27年にロシアで刊行されている。日本では1921（大正10）年に『マルクス主義の根本問題』の翻訳（恒藤恭訳）が出版されて以降、1932年まで多くの著作が邦訳されている。『史的一元論』について、本稿では基本的に1963年の川内唯彦訳を用いたが、1923年のロシア語著作集第7巻の復刻版を参照し、部分的に川内訳を変更している。

プレハーノフの伝記としてはS・パロン（1963）の翻訳があり、日本におけるプレハーノフ研究としては田中真晴（1967）が代表的なものである。

また、岩波文庫版『歴史における個人の役割』の訳者である木原正雄は、プレハーノフについてつぎのように評価している。「彼の著作は、国際的マルクス主義文献のなかでひじょうにすぐれたものであるにもかかわらず、1900年以降の彼のメンシェビキ的役割が強調されるあまり、正しく評価されなかった面も多い」（同、まえがきより）。「彼の初期の著作、とくに哲学（『史的一元論』その他）や社会発展にかんする著作は、国際的なマルクス主義文献のうちでも、もっともすぐれたものであり、現在においてもその価値を失っていない」（同、解説より）。

- 4) パロン（1963）は、プレハーノフが弁証法的唯物論という表現を用いた最初の人であるという R. N. Carew-Hunt の説を紹介している。その表現は1891年のヘーゲルに関する論文で初めて用いられた。Плеханов, Том. VII, стр. 52.
- 5) プレハーノフが引用している「フォイエルバッハにかんするテーゼ」は、1888年にエンゲルスがマルクスの原文に手を加えて『ノイエ・ツァイト』誌掲載論文「ルートヴィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結」の改訂別刷本の付録として公表したものである。川内訳は1932年に明らかにされたマルクスの原文にもとづいて訳されているようで、プレハーノフの引用文にはない冒頭の「すべて」が付け加わっている。ここでは服部文男訳（1996）にしたがった。
- 6) リャザノフ編ロシア語版プレハーノフ著作集第18巻（1925年）所収。これには2種のドイツ語訳があり、1929年のリャザノフ編、カール・シュミュックレ訳、マルクス主義叢書第21巻には「自然と歴史における飛躍」（1889年）と「弁証法と論理学」（1905年）が付録として加えられている。鷺田訳（1974年）はこの1929年ドイツ語訳からの邦訳であるが、2つの付録のうち前者が割愛されている代わりに、リャザノフの「まえがき」が訳出されている。なお、戦前に出された邦訳はいずれもドイツ語版からのものである。本稿ではドイツ語版の鷺田訳を手掛かりにしてロシア語版により原文を確かめたので多少異なる訳になっている。引用においてはロシア語版原書ページと鷺田訳ページを併記することにする。
- 7) プハーリンはロシア革命の指導者の1人であり、コミンテルン（第三インターナショナル）の幹部として国際的に著名な革命家であった。レーニン（1870～1924）も彼を「党の最大の理論家」あるいは「寵児」と評価した。そして、レーニンの死後、ネップ（新経済政策）期にあってはスターリン（1879～1953）を凌ぐ理論的権威をもつ人物であったが、1928～29年のいわゆる「上からの革命」において政治的に敗北し、1938年に反革命の罪で銃殺された。プハーリンの政治的・知的伝記としてはコーエン（1973）がある。

『史的一元論』の章別構成を記しておく。序章社会科学の実践的意義、第1章社会科学における原因と目的（因果論と目的論）、第2章決定論と非決定論（必然性と自由意志）、第3章弁証法的唯物論、第4章社会、第5章社会と自然のあいだの均衡、第6章社会の諸要素間の均衡、第7章社会的均衡の破壊と再生、第8章階級と階級闘争。

同書は日本でも第二次大戦前にいくつかの翻訳が出版された（たとえば廣島定吉訳1929年など）が、本論文の引用にあたっては、ロシア語版（1923年の第2版）の原書ページ数と、佐野・石川訳（1974年）のページ数を記す。

- 8) 角田（2005）第4章を参照されたい。

- 9) 宗教の核心に触れたところで、ブハーリンは、「『精神』は、ここでもまた、社会的『物質』の一機能であることがわかる」(стр. 203, 訳223ページ)という興味深い一文を書き留めている。
- 10) 『史的唯物論』刊行後に書かれたある論文において、ブハーリンは、同書で展開した「新説」の動機を説明している。上部構造とイデオロギーについて、その論文ではつぎのように説明されている。「私は、本書において、まず、イデオロギーと上層建築(上部構造のこと—引用者注、以下同じ)の概念を区別し、上層建築の方をさらに広範な、そしてさらに一般的な概念とみることを提議した。イデオロギーは、思想、感情、形象、規範等の諸体系である。しかるに上層建築は、多くの他のことをも包含している。すなわち、上層建築において、われわれは、次の3つの主要な領域を区別しなければならない。1. 一定の上層建築の技術、「労働手段」(略)、2. 人と人との関係(略)、3. 理念、形象、規範、感情等の体系(イデオロギー)。私はさらに、この分析をもっと先へ進めようと試みた。すなわち、もっと大きな分割と分化(音楽その他の例について)の指標を観察しようと試みたのである。そうすれば、以前にあった幾多の困難はなくなって、史的唯物論の方法はもっと正確に、もっと尖鋭になるのだ。」(蔵原惟人訳557-558ページによる、原文にあたることができなかったが、一部現代文におきかえた)。
- 11) ちなみに、ブハーリンがあげている革命の第2段階は政治革命(権力奪取)、第3段階は経済革命、第4段階は技術革命であり、ここにいたって「新しい社会形態は自らに照応した心理とイデオロギーを作り出す」とされている。
- 12) 角田(2013)第4節を参照していただきたい。

参考文献

- Бухарин, Н. (1921), Теория исторического материализма; популярный учебник марксистской социологии, Государственное издательство, Москва, 1923. 佐野勝隆・石川晃弘訳『史的唯物論—マルクス主義社会学の一般的教科書』(現代社会学大系7)青木書店, 1974年。
- Bucharin, Nicholai, Theorie des Historischen Materialismus, Gemeinverständliches Lehrbuch der Marxistischen Soziologie, Autorisierte Übersetzung aus dem Russischen von Frida Rubiner, Verlag der Kommunistischen Internationale, Hamburg, 1922. 廣島定吉訳『唯物史観』白楊社, 1929年, 改訳版1930年。
- Bukharin, Nikolai, Historical Materialism, A System of Sociology, Authorized translation from the third Russian edition, International Publishers Co., Inc. George Allen & Unwin Ltd. London, 1925.
- Cohen, Stephen F., (1973), Bukharin and the Bolshevik Revolution: A Political Biography, 1888-1938, Alfred A. Knopf, N. Y. 塩川伸明訳『ブハーリンとボリシェビキ革命—政治的伝記, 1888-1938年』未来社, 1979年。
- Korsch, Karl (1967) Karl Marx, Europäische Verlagsanstalt, Frankfurt am Main. 野村修訳『マルクス—その思想の歴史的・批判的再構成』未来社, 1967年。
- Lichtheim, George (1961) Marxism, An Historical and Critical Study, Second Edition, 1964, Routledge and Kegan Paul, London. 奥山・田村・八木訳『マルクス主義 歴史的・批判的研究』みすず書房, 1974年。
- Marx, Karl (1845) Thesen für Feuerbach, Werke, Bd. 3, S. 5-7, 533-535. 服部文男監訳『[新訳] ドイツ・イデオロギー』新日本出版社, 1996年。
- Mehring, Franz (1893) Über den Historischen Materialismus, Franz Mehring Gesammelte Schriften, Bd. 13, Philosophische Aufsätze, Dietz Verlag Berlin, 1961. 佐藤進訳「史的唯物論について」『世界大思想全集 社会・宗教・科学思想篇15』河出書房新社, 1960年, 所収。
- Плеханов, Г. В. (1895) К вопросу о развитии монистического взгляда на историю, Сочинения Том VII, под редакцией Д. Рязанова, Государственное издательство, Москва, 1923. 川内唯彦訳『改訳史の一元

- 論』岩波文庫版，上・下，1963年。
- Плеханов, Г. В. (1897) О материалистическом понимании истории, Сочинения Том VIII, под редакцией Д. Рязанова, Государственное издательство, Москва, 「歴史の唯物論的理解について」西牟田久雄・直野敦訳『歴史における個人の役割』未来社，社会科学ゼミナール5，1956年所収。
- Плеханов, Г. В. (1898) К вопросу о роли личности в истории, Сочинения Том VIII, под редакцией Д. Рязанова, Государственное издательство, Москва, 木原正雄訳『歴史における個人の役割』岩波文庫版，1958年。
- Плеханов, Г. В. (1908) Основные вопросы марксизма, Сочинения, Том XVIII, под редакцией Д. Рязанова, Государственное издательство, Москва, 1925.
- Plechanow, G. Die Grundprobleme des Marxismus, Herausgegeben von D. Rjanzanov, Übersetzung von Karl Schmücle, Verlag für Literatur und Politik, Wien, 1929. 鷺田小彌太訳『マルクス主義の根本問題』福村出版，1974年。Übersetzung von Dr. M. Nachimson, Dietz Verlag, Stuttgart, 1910, 恒藤恭改訳『世界大思想全集 第14巻』河出書房，1955年，所収。
- バロン，サミュエル・H (1963) 『プレハーノフロシア・マルクス主義の父』白石・加藤・阪本・坂本訳，恒文社，1978年。
- ブハーリン，蔵原惟人訳「史的唯物論の諸問題（躁急なる覚書）」『ブハーリン 唯物史観』廣島定吉訳，白揚社，1929年，所収。
- デボーリン，ルダス，マルティノフ，ボリーリン『「ブハーリン唯物史観」批判』廣島定吉訳，白揚社，1930年。
- エンゲルス，F. (1893) 「エンゲルスからフランツ・メーリング（在ベルリン）へ」『マルクス・エンゲルス全集』第39巻，大月書店，1975年，所収。
- エンゲルス，F. (1895) 「エンゲルスからゲオルギ・ヴァレンチノヴィチ・プレハーノフ（在チューリッヒ）へ」『マルクス・エンゲルス全集』第39巻，大月書店，1975年，所収。
- 角田修一（1992）『生活様式の経済学』青木書店。
- 角田修一（2005）『「資本」の方法とヘーゲル論理学』大月書店。
- 角田修一（2013）「経済過程における意識とイデオロギー」『唯物論と現代』（関西唯物論研究会編）第50号，文理閣，2013年10月。
- 田中真晴（1967）『ロシア経済思想史の研究 プレハーノフとロシア資本主義論史』ミネルヴァ書房。